

# アフリカでの野生生物の絶滅

## —現状と今後の課題—

柳澤アーサー (ヤナギサワ アーサー)

東京大学 (ニュージーランド)

### 1. はじめに

近年、野生動物の絶滅問題が世界中で深刻化している。本論文では、対象をアフリカ大陸の諸国に絞り、そこでの野生生物の絶滅問題を細かく見ていく。絶滅問題には様々な要素が原因となっているが、本論文では生息地破壊と密猟の問題を深く分析する。特にアフリカでの密猟に対して、国際社会、アフリカの国々の政府の対策を分析し、対策の問題点や今後の進むべき方向性を提案する。近年世界的に環境問題が意識されるようになってきたが、主に地球温暖化の側面だけである。しかし、環境は様々な側面を持っているものであり、全ての側面から保護をしなければ悪化してしまう。人間は環境に頼っていて、環境状態が悪化すれば最終的に被害を受けるのは我々人間である。従って、重要な環境保護の一側面として、我々はアフリカでの動植物の絶滅を止めるための手段をとるべきである。

### 2. アフリカでの野生生物の絶滅の現状と影響

#### 2.1 野生生物の絶滅の定義とその実態

本論文では、絶滅を「生物の種などが滅びて絶えること」(コトバンク)と定義する。これは最近始まったことではなく、動植物が誕生してからずっと起きている現象である。例を挙げると、恐竜の様々な種は約6500万年前までこの地球上に存在していたが、それ以来、もう地球上で見ることにはできない(BBC)。しかし、絶滅という現象は昔から起きているもので、なぜ今になって大きな問題として取り上げられているのか。その答えは現在絶滅が起きている速度が昔より圧倒的に上回っているからである。Pimm 他(2014)によると、今の絶滅の速度は20万年前よりおよそ1000倍速い。この絶滅の高速化は、主に人間の生息地破壊や密猟行動が原因とされている。

#### 2.2 アフリカでの野生生物の絶滅の原因

本節ではこの生息地破壊と密猟がアフリカでは、今どのように動植物の絶滅に関わっているのかを説明する。これを分かりやすく説明するために、アフリカ象の例を挙げよう。

アフリカ象は1930～1940年代には、およそ500万頭アフリカにいたが、生息地破壊と密猟により今ではおよそ69万頭しか残っていない(National Geographic)。まずは、生息地破壊から見ていこう。もともとアフリカ象は広範囲の住む空間を必要とする。しかしアフリカの人口が急激に増えているため、急速に人間と象がこの空間を争うようになってきている。従って簡単にいうと、人口増加に伴って増える人々の基本的ニーズを満たすためにアフリカ象の生息範囲が急速に限られていっていると言える。

次に密猟の現象を、アフリカ象を通して見てみよう。密猟とは「法を破ってひそかに猟をすること」(Weblio 辞書)である。毎年約3万-3万8000頭の象が密猟で殺されるとみられる(SOS Elephants)。象一頭の象牙から得られる収入は農業を12年間行うのと同じと言われている(SOS Elephants)。この象牙の需要が止まらないことが、密猟が続いている原因と言えるだろう。

ここではアフリカ象の例を使って生息地破壊と密猟を説明したが、この二つの人間行動はアフリカ象に限らず、アフリカで生息する様々な動物の減少に当てはまる。主な動物を挙げると、犀、トラ、ライオンなどである。

### 3. 社会の対応とその問題点

#### 3.1 国際社会の対策

密猟を止めるために「ワシントン条約」という条約が181加盟国の間で結ばれている(CITES)。この条約は絶滅の恐れのある野生動植物の国際取引を制限している。条約には「附属書Ⅰ」から「附属書Ⅲ」があり、「附属書Ⅰ」では特定の種の商業目的での取引がすべて禁止されている。「附属書Ⅱ」では商業目的での取引は許されているが、輸出国政府の管理当局からの輸出許可書が必要となっている。「附属書Ⅲ」は絶滅の恐れが比較的低い種を対象としているので、この論文で説明はしない。この条約が機能している例として、再びアフリカ象の話に戻ろう。象牙の取引は1997年までは「附属書Ⅰ」で禁止されていた。しかしその効果があってナミビア、南アフリカ、ボツワナとジンバブエの4カ国では象の個体数が回復してきた為に保護度合いを「附属書Ⅱ」に変えている。このように野生動植物の取引を禁止、あるいは制限することで、アフリカなどの地域で国際社会が

密猟に歯止めをかけようとしている。このような条約だけではなく、米国などの先進国の政府の多くは各々自国での違法取引の法律や対策を設けている。

### 3.2 アフリカ国々の対策

前節では国際社会の対策を見たが、アフリカ個々の国はどのような対策を立てているのだろうか。実は近年アフリカ諸国の対策は急速に厳しくなっている。その例としてケニアの政府が取り組んでいる対策を検討してみよう。この対策は密猟罰則強化と軍人やレンジャーの活用が中心となっている。Library of Congress (2015)によると、以前は国立公園内での密猟は最大でも約 232 ドル (US) の罰金か 3 年間の実刑判決であった。それに対して中国では象牙が 1 キロおよそ 900 ドル (US)、粉末状の犀角はなんと 1 キロおよそ 6500 ドル (US) で売られていたのである。しかし 2014 年には規制が強化され、罰金最大 230,540 ドル (US) か罰金と終身刑の両方で罰される。この新しい規制の効果はてき面で一人の中国人がケニアから象牙を密輸しようとした事件では罰金 230,000 (ドル) 若しくは 7 年服役するか判決が命じられた (Al Jazeera)。

ケニアの政府は法律だけではなく、現場でのレンジャーの監視体制も強化した。このレンジャー達の役目は、密猟者を見つけ出し動物が密猟される前に止めることである。ケニア北部のエワソ地域では下の図で判る様に 2010 年から設置されたレンジャーのおかげでアフリカ象の密猟事件が急激に減少している (International Elephant Foundation)。

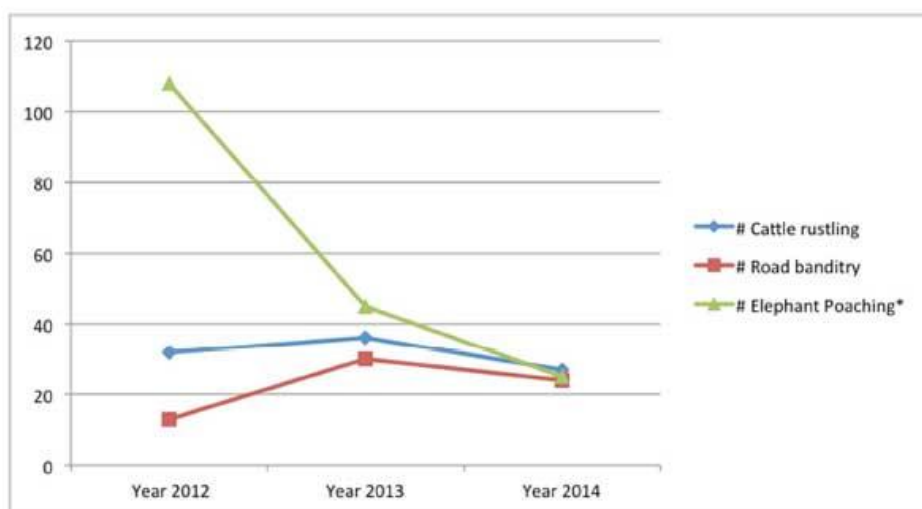


図1 エワソ地域の違法事件 (International Elephant Foundation)

またレンジャー達は最新のテクノロジーを最大限に活用している。ドローンを使い動物達や密猟者の居所などを確認したり、象牙や犀角にマイクロチップを設置して動物の現在地、または密猟された象牙や犀角の行方を追跡している。このようにテクノロジーを利用して現場と法対策の連動性を深め、密猟者を裁判まで持っていく過程をスムーズにしている。

### 3.3 国際社会とアフリカ諸国の問題点

国際社会とアフリカ国々の対策の今の一番の問題点は、絶滅の根本的な原因の解決では無く、表面上の問題だけを処理をしていることである。絶滅問題の根本には、もっと大きな社会問題が背景にある。

アフリカ諸国の政府の大半は国をうまく支配しきれずにいる。経済的にも世界中の他国に比べるとかなり出遅れていて、人々への福祉も低い。結論から言えばアフリカの貧しさの中に住む人々は政府に頼れず、自分の力で自分または家族を守らなければならない。違法だが密猟などの活動は他の無学の仕事に比べると経済的利益が桁違いに大きいのである。これを踏まえた上でアフリカの絶滅問題を考えてみると、天然資源などがあふれるほどある環境を利用して生き残っていこうとするのは人間の当然の行動とも言える。正に「薬より養生」である。従って現在の国際社会とアフリカ諸政府の対策は短期的には続けなければならない事だろう。また供給を制限するだけではなく、需要の元にも歯止めをかけなければならない事を忘れはならない。アフリカの絶滅問題は、アフリカ諸国だけではなく中国やベトナム等の象牙や犀角の需要が高い国にも責任があるのである。

### 3.4 国際社会と国の今後の課題

アフリカの絶滅問題を根本から解決するにはアフリカ個々の国の国民達が安定した生活を送れるような環境を作る事が不可欠である。この考えはとても理想的で困難を伴うが、この長期的目標をしっかりと定める事により、初めてそれに向けての短期的目標や対策を組み立てることができるはずである。

またこの問題の重要性を社会に伝える必要がある。人間は本能的に自分を中心と考える動物である。動物を助けることよりも人間に直接関係する問題の解決を優先したほうが良いと言う考えは当然であるが、問題の連動性を社会に伝えることによって初めて対策の重要性が見え賛同も得られるのではないか。アフリカの一つの国だけが問題解決に向けて

頑張っても、他の国々も連動した体制を取らないと抜け穴ができるだけで努力も無駄となる。

#### 4. おわりに

人々は皆同じ地球に住んでいて、地球を大切にする義務は皆にある。しかし、どこまでが個人の責任であり、どこまでが国や政府の責任であり、どこまでが国際社会の責任なのかは非常に曖昧である。しかしながらこの絶滅危機の動植物を守る必要性は変わらない。すべての動植物は一つの大きな生態系に属している。その動植物の中の一つでも絶滅してしまうと、生態系のバランスが崩れ、最終的には人類にもその影響が及ぶのである。しかもこの悪影響を受けるのは主に我々の世代ではなく、次世代そしてその次に続く世代である。この問題解決は我々のためだけではないことも忘れてはいけない。この道徳観を胸に抱えて、今後の自然保護を実行するべきである。

#### 参考文献及び参考サイト

コトバンク「絶滅（ぜつめつ）とは」 <https://kotobank.jp/word/絶滅-172865> 最終アクセス 2015年6月27日

Al Jazeera (2014) Kenya tough anti-poaching laws enacted

<http://www.aljazeera.com/news/africa/2014/01/kenya-tough-anti-poaching-laws-enacted-20141282214647243.html>, last accessed 3 July 2015

BBC, Cretaceous-Tertiary mass extinction

[http://www.bbc.co.uk/nature/extinction\\_events/Cretaceous%E2%80%93Tertiary\\_extinction\\_event](http://www.bbc.co.uk/nature/extinction_events/Cretaceous%E2%80%93Tertiary_extinction_event), last accessed 3 July 2015

CITES, Member Countries <http://www.cites.org/eng/disc/parties/index.php>, last accessed 3 July 2015

International Elephant Foundation, Africa Programs

<http://www.elephantconservation.org/programs/africa-programs/>, last accessed 29 June 2015

Library of Congress (2015) Wildlife Trafficking and Poaching: Kenya,

<http://www.loc.gov/law/help/wildlife-poaching/kenya.php#Update>, last  
accessed 1 June 2015, last accessed 3 July 2015

National Geographic (2014), Beloved African Elephant Killed for Ivory—

"Monumental" Loss [http://news.nationalgeographic.com/news/2014/06/140616-  
elephants-tusker-satao-poachers-killed-animals-africa-science/](http://news.nationalgeographic.com/news/2014/06/140616-elephants-tusker-satao-poachers-killed-animals-africa-science/)

Pimm, S. L., Jenkins, C. N., Abell, R., Brooks, T. M., Gittleman, J. L., Joppa, L. N.,

...Sexton, J. O., (2014) *The biodiversity of species and their rates of  
extinction, distribution, and protection*, AAAS: Washington DC

SOS Elephants, About the African Elephant

[http://www.soselephants.org/about\\_elephants.html](http://www.soselephants.org/about_elephants.html), last accessed 3 July 2015

Weblio 辞書 「密猟とは」

<http://www.weblio.jp/content/%E5%AF%86%E7%8C%9F> 最終アクセス 2015 年

7 月 3 日